太陽と星の下

小川未明

青空文庫

S少年は、町へ出ると、時計屋の前に立つのが好きでした。そして、キチキチと、小さな針が、正しく休みなく、時をきざんでいるのを見て、――この時計は、どこの工場で、どんな人たちの手で造られたのだろう――と、空想するのでした。

すると、明るい、清潔な、設備のよくいきとどいた、近代ふうの工場が、目の前に浮かび上がります。彼は、いつか自分も、こんな工場へ通って働き、熟練工になるかもしれないと、思ったりするのでした。こうして、町は、少年にいろいろな、たのしい夢を与えてくれました。

ある日、四つつじの角のところへ、新しく美術店ができました。しかし、そこには、新しいものより、古いもののほうが多かったから、むしろ、こっとう店というのかもしれません。入り口のガラス窓の内には、まるいつぼがおいてありました。

少年は、その深みのある、青い海をのぞくような色に、ひきつけられたのです。

「いい色だな。」と、そのやわらかな感じは、なんとなく気持ちをやわらげました。まだ、なにかあるかと、あたりを見まわすと、おくの方の台に、赤いさらがかざってありました。

これは、夏の晩方、海面へ、たれさがる雲のように、みずみずとして、美しかったので、こんどは、目がその方へ奪われてしまいました。なんでも、その図は、中国人らしい、一人の女が、赤いたもとをひるがえして、おどっているのでした。

少年は、近くそばへ寄って見たかったのだけれど、買えるような身でないから、さすがにその勇気がなく、こころ残りを感じながら、店さきをはなれたのです。

すこしくると、魚屋がありました。店さきの台の上に、大きな切り身がおいてありました。その肉の色は、おどろくばかり毒々しく、赤黒くて、かつて、魚では、こんなのを見たことがありません。

「これは、鯨の肉だな。そうだ、南極からきた冷凍肉だ。人間とおなじく、赤ちゃんをかわいがる哺乳動物の肉なんだ。」

こう思った瞬間、いままでの頭の中のなごやかなまぼろしは消えてしまって、そこには、残忍な、血なまぐさい光景が、ありありと浮かびました。

捕鯨の状況を考えると、たえられない気持ちがして、少年は、途中にある丘にかけ登りました。丘の上には、大きなけやきの木がありました。その根に、腰をおろしたのです。ついこのあいだまで、芽をふいたばかりの新緑が、うす緑色に煙っていたのが、すっかり青葉となっていました。ここからは、あちらまでつづく、町の方が見おろされました。ぴか、ぴかと、線を引くごとく流れるのは、自動車でありました。そのかぶとむしのような、黒光りのする体に、アンテナを立てていて、走りながら、どこかと話したり、また、放送の音楽をきいたりするのです。

「人間は、ほかの動物のできない発明をする。もし、おれが鯨だったら、どうして人間という

敵から、のがれることができようか。」と、少年は、空想しました。

もっと、もっと、氷山のおく深く、安全な場所をさがして、はいりこむだろう。いや、それもだめだ、どんなかくれ場でも、人間はさぐる。精巧な機械を持っているし、また、おそろしい武器を持っている。そう考えると、少年には、人間がひきょうに見えました。そして、自分の力よりほかに、たのむことができない鯨がかわいそうになりました。それは鯨とかぎりません。命のとうとさは、強いもの、弱いもの、べつにかわりがないからです。

少年は、世の中の、不公平や、不平等が、つぎつぎにうずまき、頭がつかれたので、やわらかな草の上へ、仰向けになってねころび、目をふさぎました。太陽の光は、やわらかなようでも、するどかったのです。目をとじていても、まぶしかったのでした。

このとき、耳もとへ、ささやくものがありました。大空をわたる、初夏の風が、草の葉を分ける音でした。

「おごるものは、おごらせておくがいいのさ。かならず天罰があたるから。いつ氷河がやってくるかもしれない。あまり不意で、逃げるひまのなかった、マンモスの肉が、まだくさらずに、氷の中から出たというではないか。それどころか、今日にでも、太陽が大爆発をしないとかぎらない。そのときは、地球上のものは、ことごとく焼けてしまうのだ。」

あいづちをうつごとく、どこかの工場から、正午の汽笛が鳴りひびきました。少年は、これを機会に、丘を下りたのでした。

机の前にすわって、雑誌を見ていると、Kくんが、ボールをしないかと、S少年を呼びにきました。

すぐ外へとび出すと、

「畑へ、いこうよ。」と、Kが、いいました。

このころまで、家と家の間の通路となっている路地しか、子供たちにとって、遊び場がなかったのを、ようやく、青物が出まわり、家庭菜園などというものが影を消してから、ふたたび、いままでのごとく、空き地や、原っぱが、子供らの手にかえったのです。したがって、彼らは、あやまって、窓のガラスをわり、しかられることもなく、たのしく、のびのびとして、ボールが投げられるのでした。

まりを投げているさいちゅうでした。

「Kちゃん、君に飛行機が見える。」と、S少年は、なにを思い出したか、手をやすめて、空をながめました。

Kも手をやすめて、おなじく空をながめたのです。

「音はするけど、なんにも見えないね。Sちゃんには見える。」と、Kは、きいてかえしました。

「たいへん近く音がきこえるけど、わからない。よっぽど高いところを飛んでいるんだね。」

二人は、しばらく、ボールを投げるのを忘れて、夢中で、飛行機をさがしていました。戦後、彼らの希望は失われたので、せめてその姿だけでも見たかったのです。この瞬間にも、せめ

て思いきり高く上がって、自由に飛べたらという、あこがれが胸の中を、わくわくさせました。やがて、空は、石竹色から、オレンジ色と変わって、暮れかかったのであります。

すでに、あのときから、はや一週間近くたったであろうか。少年は、あの中国の女のおどっている、赤いさらが見たくなりました。

「散歩してこようか。」

町へくると、いつものごとく、トラック、自転車、自動車が走っていました。さんさんたる太陽が、あらゆる地上の物体を光の中にただよわせていました。少年は、四つつじのところをうろつきながら、

「おれはきつねにばかされているんでないだろうな。」と、自分に向かっていったのでした。なぜなら、あのこっとう店が、いつのまにかなくなって、見つからなかったからです。そのかわり、そこが葬儀屋となって、真新しい棺おけや白い蓮華の造花などが、ならべてありました。

少年は、しばらく考え込んで、去りかねていましたが、念のため、魚屋の前を通ってみました。すると、魚屋は、前とおなじところにあって、台はかわいて、もうその上には、鯨の肉は見あたりませんでした。

彼は、家に帰ると、この話を兄さんにしたのであります。

「あんまりの変わりかたで、僕、きつねにばかされたのでないかと思った。」

これをきくと、横になって、新聞を見ていた兄さんは、笑いながら、起き上がりました。そして、弟に向かって、つぎのようにいったのです。

「戦争の終わるころは、品物が不足していて、だれでも、すばしっこく、人のほしがる品を動かしたものは、遊んでいても、大もうけができたのだ。もとより、そういう人々は、世の中のためとか、他人のためとかいうことは考えていない。ただ自分さえよければいいので、ぜいたくしたものさ。一方には、いままでの金持ちが貧乏して、着物を売るやら、家宝を売るというふうで、町にも、幾軒か、こっとう店ができたのだよ。新興成金を目あてにね。ところが、やみ物資もなくなると、たちまち金もうけの道がとだえて、にわか大尽は、また昔のような丸はだかとなって、もうこっとう品など買うものがなくなる。それどころか、中国へ出す国内の生産が復興しないから、ともぐいするようになる。弱いものからまいってしまう。近ごろ、死ぬ人がめっきりふえたのもこんな原因がある。だから、町のこっとう屋が、葬儀屋に早がわりするのは不思議でないよ。」

「兄さん、息苦しい世の中になったんだね。」と、少年は、いいました。

「なにしろ、せまい国の中へ、八千万からの人間がおしこめられているのだものな。」と、兄さんは、ため息をつきました。

「それは、僕にもわかるよ。なぜって、小さな入れ物の中へ、金魚をたくさん入れておくと、だんだん死んでしまうものね。」

彼は、このごろ、やっと、ひろびろとした、原っぱで、野球のできる喜びを思い起こして、不幸な祖国のきゅうくつな現状を悲しまずには、いられませんでした。

「どれ、原っぱへ遊びにいってこよう。」

少年は、じっとして、家にいられなくなって、こう叫ぶと、外の方へ飛び出しました。しかし、自由を欲する彼に対して、だれもとがめるものはありませんでした。

原っぱへいけば、そこには、かならず、二、三人の彼の仲間がいました。大空は、まんまんとして、原の上に青い天蓋のように、無限にひろがっているし、やわらかな草は、美しい敷物のごとく、地上を目のとどくかぎりしげっていました。

「世界じゅうを、どこまでも飛んでいける、渡り鳥はしあわせだね。」と、Nくんがいいました。

「そうするように、神さまが、羽をくだされたんだもの。」と、Kくんが答えました。

「なぜ、人間にだけ、それができないのだろうね。」と、Sくんが、ただすと、

「人間にだって、汽船や、飛行機を発明する力を神さまがくださったのだ。自由にどこへでもいけるようにね。」と、Kくんが、いいました。

「しかし、ここから先、いってはいけないとか、ここから内へ入ってならないとか、実際はきゅうくつなんでないか。」と、S少年は、ききかえしました。

「神さまは、世界をみんなのため、お造りになったのだから、だれにもそんな縄張りをする権

利なんかなかったのだ。それを人間どうしが、たがいに意地わるをして、強いものが、弱いものをいじめて、かってに楽をしようとしたのだよ。」と、Kくんは答えて、なお、考えていました。少年はKくんの考えが、まったく自分の考えと一致しているのを知って、うれしかったのです。

「Kくん、僕は、人間があまり強欲なものだから、戦争をしたり、けんかをしたり、罪もない動物まで殺したりするのだと思うよ。神さまの与えられた生命を奪ってしまうという、残忍な行為は、ゆるされないのでないかね。」と、少年は、ききました。

「だから、そういう残酷なことをするものには、きっと罰があたるだろう。」

「君もそう思う。僕も、天罰があたると思っている。」

「どうして、ほかの動物より、人間のほうがえらいんだろうね。」と、いままで、だまっていた、Kくんが口を開きました。

「おたがいに、愛情があり、しんせつだったから、万物の長といわれたが、いまは、残忍なこと、ほかの動物の比でないから、かえって、悪魔に近いといえるだろう。」と、S少年がいいました。

このとき、赤く日は、西の山へ沈みかけていました。三人の少年は、しばらくだまって、地平線をながめながら、思い思いの空想にふけっていました。

考えれば、まだ地球には、どれほど、人の住んでいない広い土地があるかしれない。人間の

必要とする宝が埋ずまっている山や、谷があるかしれない。また茫漠として、耕されていない野原があるかもしれない。それなのに、衣食住に窮して、死ななければならぬ人間がたくさんいる。それはどうしたことだろうか。

飢餓、戦争、奴隷、差別、みんな人間の社会のことであって、かつて鳥類や、動物の世界にこんなようなあさましい、みにくい事実があったであろうか。こんなことをしなくても、彼らは自然をたのしみ、なやむことなく、安心して生活するではないか。こんなような疑いが、期せずして三人の頭の中にあったのでした。

「ああ、忘れていた。こんど学校へ国際親善の題で、作文を書いて出すのだったね。」と、S少年が思い出して、いいました。

「君は、なにを書くつもり。」と、Nくんが、二人の方を向いて聞きました。

「僕は、外国のお友だちに、人間はみんな平等なのだから、おたがいに力を合わせて、みんなが幸福になるような、いい世界を造ろうじゃないかと訴えるつもりだ。」と、Kくんが、いいました。

「Kちゃん、僕も、おなじなんだよ。いままで、大人たちの強欲から、戦争が起こったんだ。自分にとってだけでなく、相手にとっても尊い生命であると知ったら、殺し合うことはできないはずだ。どんな幸福も、これほどの罪悪には償わないと思うよ。だから、神さまの心にそむくような武器は、いっさいなくしてしまって、どうしたら平和にみんなが生活することができ

るかと、相談するようにしたい。世界じゅうのお友だちが、その気になってくれたら、僕たちの時代には、いままでとちがった、りっぱな世界になれるのでないか。」と、S少年がいうと、

「賛成、賛成！」と、Nくんが同感して、熱い拍手をおくりました。

日はまったく暮れて、いつしか、夕焼けの名残すらなく、青々として澄みわたった、空のたれかかるはてに、黒々として、山々の影が浮かび上がって、そのいただきのあたりに、きらきらと、一つ、真珠のような星が、かがやきました。こんな時分になっても、まだあちらでは、遊んでいて、元気のあふれる子供らの声が、きこえていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　14」講談社
　1977（昭和52）年12月10日第1刷発行
　1983（昭和58）年1月19日第5刷発行
底本の親本：「太陽と星の下」あかね書房
　1952（昭和27）年1月
初出：「新児童文化　第6冊」
　1950（昭和25）年9月
※表題は底本では、「太陽《たいよう》と星《ほし》の下《した》」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2019年4月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

太陽と星の下

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/